

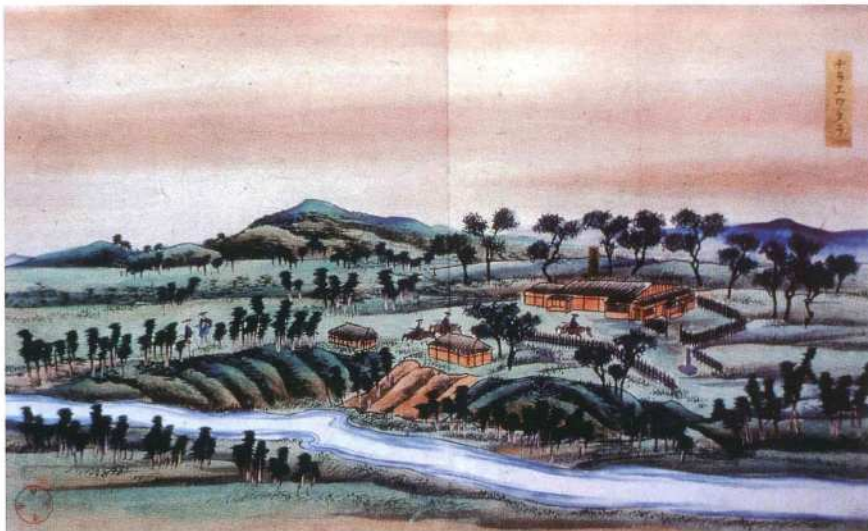
# 中標津町郷土館だより 第25号

## 会津藩と斜里山道

発行:平成25年11月30日  
発行所:中標津町教育委員会  
標津郡中標津町丸山2丁目22番地  
電話:教育委員会(0153-73-3111)  
郷土館(0153-72-2190)  
[http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan\\_web/index.htm](http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan_web/index.htm)



『標津番屋屏風』(新潟県西蔵寺所蔵)



『北海道歴検図 根室州 下』「チラエワタラ」<sup>めがた</sup>目賀田 <sup>たてわき</sup>帯刀 画(北海道大学付属図書館所蔵)

嘉永6(1853)年、アメリカ使節ペリーが浦賀に来航した年、ロシア使節プチャーチンもまた、開港を求め長崎に来航しました。翌安政元(1854)年に日本とロシアは日露和親条約(日露通好条約)を締結。エトロフ島とウルップ島との間に国境を画定しましたが、サハリンについては交渉が難航し、棚上げにされました。

幕府は、こうしたロシアとの国境問題や東方の進出に危機感を強め、安政2(1855)年に再び蝦夷地を直轄し、松前藩と東北諸藩(仙台・南部・津軽・秋田・庄内藩)に警衛を命じました。安政6(1859)年には、松前藩に代わって会津藩が蝦夷地の北辺警衛にあたり、現在の別海町西別から紋別市までの一帯が領地として与えられました。

会津藩士らは、警衛の拠点となる標津まで陸路「斜里山道」を3泊4日の行程で現地に向かいました。箱館奉行所は、藩士や役人が道中を通行するにあたり、標津側会所の係がそれぞれ宿泊所や休憩所にもてなすよう命じました。万延元(1860)年、郡奉行の樋口佐多助を筆頭とする藩士20数名が標津に無事到着。幕府からの領地渡の後、現地の漁場の番人やアイヌを集め、各種取り決めごとの申し渡し儀式である「ラムシャ」を行いました。

## ■会津様ご通行なり!!

会津藩士が現地受け取りのため斜里山道を通行した際に、道中の休憩所や宿泊所での標津会所側の対応を、箱館奉行所の役人が記述した文書『箱館奉行所モンベツ諸書付伝蔵宛封書』[安政七(1870)年]が残されており、それぞれの係が出向いてもなしていた様子を知ることができます。



「箱館奉行所モンベツ諸書付伝蔵宛封書」

### 地点① チラエワタラ (道中の宿泊所のひとつ)

「仁太郎どの献立 鍋仕込み 致し平助にあずけ早々シベツへ下り本料理とすべし平助ノツケまで料理手付其後相談に寄べし」



### 地点② チナナ

「亭主松蔵(中略)松蔵殿 半てん羽織用意いたし川詰(標津川河口付近)まで御出迎可致事」



# 会津藩と斜里山道



## ■会津藩陣屋はどこにあったの?

### 地点④ 会津藩陣屋跡推定地

昭和57(1982)年に、標津町教育委員会によって標津市街地南側のホニコイ地区に所在する「ホニコイチャシ跡」の試掘調査を実施したところ、幕末期と考えられる柱の跡が発見されるなど、ここに陣屋が建設された可能性を示す遺構が見つかりました。

(標津町教育委員会 1983)



ホニコイチャシ跡(陣屋推定地)

松浦武四郎の『知床日誌』[安政5(1858)年]の記録には、「ホニコイ番屋追分有、左舎利(斜里)山道右十三丁の方シベツ」とあり、ホニコイは斜里と標津を結ぶ位置にあったとしています。

当時、幕府は北辺警衛を行う上で情報を迅速に伝達するため海路と陸路の整備に着手しており、その一環で東西蝦夷地を結ぶ連絡路として斜里山道が作られました。この場所に陣屋が置かれた理由は、こうした情報網・流通網と関係があるからと思われます。現在の中標津町俵橋付近から標津市街をつなぐ国道272号線沿いは斜里山道とほぼ同じところを通っています!!



松浦武四郎

### ■当時の様子とは!?

#### 地点③ 標津番屋

会津藩領下の標津の様子を知る史料として元治元(一八六四)年に会津藩の絵師、星晩邸によって描かれた「標津番屋屏風」があります。ただし、作者である星晩邸は標津に来ていないため、他の絵師によってスケッチされたものをもとに描いたと考えられています。その絵師とは、星晩邸の弟子である一之瀬紀一郎とされています。一之瀬は、藩の絵図面方として万延元(一八六〇)年にも標津に来ており、標津会所でのラムシャ(通達儀式)の様子をスケッチして当時の状況を記録し藩に伝えていました。標津番屋屏風がとても詳しく描かれているのは実地でスケッチしていた一之瀬によるものと考えれば容易に理解できます。

屏風を見ると、標津川河口で遡上してきたサケを番屋の人々が水揚げをし、塩切蔵に運んで塩漬けにしている様子が描かれています。塩切蔵と並んで会所があり、文久二(一八六二)年に標津に赴任した南摩綱紀と思しき人物が視察している様子や屏風中央には標津支配人・アイヌ通辞である加賀伝蔵と思しき町人が描かれています。武佐岳と思われる山の麓には、現在も同一の場所にある標津神社も描かれているなど、多くの情報が凝縮している貴重な歴史史料です。

### ↓ 幕末期の標津市街



標津番屋屏風(新潟県西巖寺所蔵)



標津市街地図

# 年表

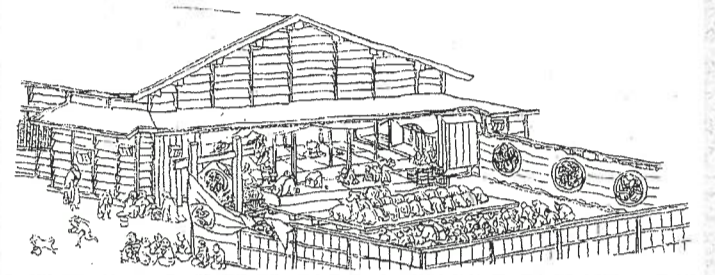
西暦	元号	出来事
1789	寛政元	・東部奥蝦夷地を請け負った飛騨屋久兵衛による過酷な労働にアイヌが蜂起し、支配人や番屋の人々を殺害した(『クナシリ・メナシの戦い』)
1792	寛政4	・ロシアの使節ラクスマンが日本との通商を求め根室に来航
1796	寛政8	・イギリスの軍艦プロビデンス号が室蘭に寄港
1799	寛政11	・蝦夷地に頻りに異国船が往来したことを受けて、幕府が蝦夷地全域を直接支配し、警備を津軽・南部藩に命じた。 〔⇒第一次幕領期～安政4(1821)年まで〕 ・幕府は、蝦夷地の北辺警衛と開拓の拠点として野付をはじめ各地に会所を配置【図1】
1801	享和元	・蝦夷地御用掛 松平忠明が通行するにあたり、八王子千人同志によってアイヌの踏み分け道(斜里一釧路間)が開削された(『斜里山道』=東西蝦夷地の連絡路)
1810	文化7	・標津川沿いのアイヌの踏み分け道が開削された
1850	嘉永3	・チライワタラに止宿所移築
1853	嘉永6	・ペリー(米国)浦賀に来航・プチャーチン(露国)長崎に来航
1854	安政元	・日米和親条約締結
1855	安政2	・日露和親条約締結⇒千島列島の択捉島と得撫島に国境が画定
1856	安政3	・松浦武四郎斜里山道踏破(⇒『廻浦日誌』)
1857	安政4	・アイヌへの種痘始まる、目賀田帯刀通行
1858	安政5	・松浦武四郎斜里山道踏破(⇒『戊午日誌』) ・松浦武四郎⇒「ホニコイ番屋追分有、左舍利山道、右十三丁の方シベツ」と記録を残す ・下田にて日米修好通商条約締結
1859	安政6	・江戸幕府は、蝦夷地を分割して会津・津軽・南部・秋田・庄内・仙台の東北諸藩に領地を与え、北辺警衛にあたらせた。 ⇒現在の別海町西別から紋別までが会津藩領となり、北辺警衛と開拓がはじまる ・松浦武四郎『東西蝦夷地山川地理取調図』完成
1860	万延元	・会津藩士(一ノ瀬紀一郎他)たちが標津の会所に到着し通達儀式ヲムシャが行われた【図2】
1861	文久元	・箱館の戸切地陣屋にて、陣屋建設の準備を進める ⇒会津藩陣屋造営開始
1862	文久2	・会津藩陣屋造営 ・会津藩主の松平容保 京都守護職を拝命し、上洛 ・南摩綱紀が標津代官着任 ・加賀伝蔵が標津場所支配人になる【図3】 ・屏風の元絵が描かれる
1863	文久3	・会津藩陣屋建設完了⇒藩士も会所から陣屋が置かれたホニコイに移住 ・会津藩士の稲村兼久とその子孫が死去⇒大正年間に墓石が野付に移転【図4】
1864	元治元	・星暁邸によって、『標津番屋屏風』が描かれる
1867	慶応3	・南摩綱紀、任期満了に付、帰還
1868	慶応4	・会津藩、鳥羽伏見の戦いに敗れ、会津へ ⇒北方警備にあっていた藩士らも標津を引き揚げ、会津へ ・南半之助、『標津番屋屏風』輸送のさなか会津戦争勃発により新潟市太郎代の南家蔵に運ぶ
1885	明治18	・新斜里山道開通により標津川沿いの道廃止

## 参考文献

- 小野哲也ほか編(2013)『会津藩蝦夷地御領分シベツ元陣屋創建150年記念 北辺の会津藩旗―幕末会津藩史外伝―』  
 標津町郷土史研究会編(1985～87)『蝦夷地御領分シベツ表ホニコイ 御陣屋造営日記』  
 梶田光明編(1983)『標津の竪穴XI』  
 梶田光明編(1984)『標津の竪穴XII』  
 中標津町郷土館(2001)『近世のなかしべつ ～旧斜里山道を中心として～』



【図1】『北海道歴検図 根室州 上』「野付之図」  
目賀田帯刀 安政4(1857)年  
北海道大学付属図書館蔵



【図2】『御武者(ヲムシャ)の図』  
万延元(1860)年8月 一ノ瀬紀一郎 画  
別海町郷土資料館付属施設加賀家文書館蔵



【図3】『自画自賛』加賀伝蔵 画  
別海町郷土資料館付属施設加賀家文書館蔵



【図4】会津藩士の墓(標津町指定文化財)